

親子の初めての戦争絵本

小野 恭子

柳田先生、はじめまして。私と主人には、もうすぐ二歳になる息子航太郎（以下、航）がいます。この夏、家族で楽しんでいた絵本に関して、とても印象深いことがありました。主人と二人でしみじみと噛みしめていた所、柳田先生に気持ちを伝えることができる機会があることを知り、矢も盾もたまらず筆をとった次第です。

私も主人も本を読むことが大好きで、航が生まれてからは二人、競つように幼少から親しんだ松谷みよ子さん、せなけいこさん、長新太さんの著作など様々な絵本を読み聞かせて参りました。航も絵本に興味を持った様子で、十一ヶ月頃から「これ」（読んで）と特定の本を持ってくるようになりました。平日は私の、休日は主人の膝の

上にちょこんと座り一日何度も『しょうぼうじどうしゃじぶた』『のろまなローラー』などのお気に入りの絵本をリクエストするようになりました。小さな右手の人差し指を上に向けて、「もっかい!」とおねだりする姿はとても可愛いものです。

そんな日々を送る中、今年の夏がやってきました。この時期はやはり戦争ものの絵本を読み聞かせたいと思い、冠新道の図書館で探した所、目にとまったのは『火垂るの墓』でした。航には少々長いと思ったのですが、これも縁と、借りて帰りました。今までの絵本よりも字が多いため、じつと聞いてくれないだろうと思いつつ読み始めたのですが、航はつろちよろすることなく、絵本に集中している様子です。驚きましたが、お蔭で私もストーリーにのめり込み、いつの間にか心を込めて読み進めておりました。お母さんが爆撃で死ぬシーンでは、感極

まり私は号泣してしまい、そんな姿を初めて見た航はキョトンとし、その後はじーっと私を観察していました。私が涙の理由や戦争の悲惨さを説明すると更に私を見つめます。言葉が継げなくなった私は、夢中で続きを読み進めました。映画でしか見たことのなかった『火垂るの墓』を、人の親というものになって初めて読んだためか、今まで以上に幼い兄妹の健気さや不憫さ等が身に沁み泣きながら三十分以上をかけて読み上げました。気づくと、航は姿勢を変えることなく最後まで本を見つめて聞いており、終わった瞬間、お決まりの「もっかい！」が始まりました。内容の重さと深さに対する私の覚悟が足りず、精神的にも辛かった為、その日にもう一度読むことはできないことを説明し、翌日読むことにしました。

翌日、「昨日は、私が泣いていたのが珍しくて最後までじっとしていたのだろう」と思い、極力感情を抑えて

淡々と読み始めました。航は相変わらずじっとしていましたが、私が泣いていた場所で「ママ！エーンエン」と言つのです。その言葉で、「昨日の読み聞かせで私が感じた感情、その背景説明の端緒は航に響いているのだ」と感じ、また涙が堰を切って溢れました。その後も返却まで毎日のように火垂るの墓の読み聞かせが続きました。折角のチャンスなので、私も主人もそれぞれの祖父母や父母の戦争の体験話を思い出しながら話してみました。結果は、残念ながら『火垂るの墓』の興味には優れませんでした。

こうして、何気なく手にとった『火垂るの墓』をきっかけに私も主人も久々に戦争を振り返る事ができ、また航に対して戦争について知りうる知識や感情を伝える機会を得ました。そして、戦争という題材は学校などに任せるだけでなく、少しずつでも家庭でも伝える努力をし

ていかねば、と気付かされました。幼い航には私達の感情や説明が全て伝わったわけではないと思いますが、心のどこかに毎年少しずつ貯まっていってくれたら、と思います。また、絵本を読むことで子供の世界を広げるのは勿論、こういった形で私たち親も育てられているのだな、と絵本を読むことの大切さを再認識した夏でした。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

息子さんの航太郎さんが十一ヶ月の頃から、自分から「これ（読んで）」と絵本を持ってくるというのは、早いですね。ブックスタートに取り組んでおられるご夫妻の様子を想像できます。もうすぐ二歳という時期に、読み聞かせに、『火垂るの墓』を選んだとは、“英断”ですね。もともと長めの短編物語なので、絵本に作っても、文章が多く、深い感情の動きが書き込まれていません。

ところが、どうでしょう。航くんは、「うるちよろすることなく、絵本に集中している様子」だったということです。ブックスタートからの読み聞かせによって、こういう長い物語をも追えるようになっていたのでしょうか。

母親である小野さんも読み進むうちに、物語に感情移入をして、ほたるの母親が爆撃で死ぬシーンでは号泣してしまったとか。三十分もかかる読み聞かせを最後までしっかりと耳を傾けただけでもすばらしいと私は思ったのですが、“第二幕”があつたのですね。

実は、「もっと（いつ）かい」に促えて、『火垂るの墓』の読み聞かせをしていくと、前日小野さんが号泣した場面になると、なんと航くんは、「ママ！エーンエン」と言ったというではありませんか。私も思わず感動のあまり涙してしまいました。《子どもの感性は凄い！》と、あらためて思ったのです。

大人は往々にして、子どもの感性について、言葉にする表現が

いまだついてこないがゆえに、この子は幼いからまだわからないのだと思いこんでしまいがちです。しかし、子どもは人間が生きるうえで本質的に大事なことは、たとえ言葉で表現できなくても、感覚的には（あるいは心の深いところでは）わかっているのです。

幼い日における絵本の読み聞かせをはじめとして、子どもを取り巻く家庭環境、情報環境がいかにより子どものパーソナリティ（人格）形成に重要か、その理由はまさに子どもでも大人が想像している以上に感覚的にわかっているという点にあると言えるのです。

子どもに対するいのちの教育は難しいと、よく言われますが、私はいのちの教育は知識だけの教育では子どもの心に届かない、幼き日からの読み聞かせや親がどこまで心をこめて子どもに接するか、そこがしっかりしなければはじまらないと思っています。

小野さん、すばらしい体験を披露してくださり、ありがとうございます。